

大学生における性役割志向によるライフコース観の比較

Comparison with Attitudes toward Life Courses by Gender Roles and Among College Students

佐野 まゆ¹⁾, 高田谷久美子²⁾, 近藤 洋子³⁾

SANO Mayu, TAKATAYA Kumiko, KONDO Youko

要 旨

時代と共に性役割志向が変化してきたが、現代の青年期にある男女において、どのような性役割志向を持ち、それが理想のライフコース、および理想の結婚とどのような関係があるかを検討したところ、下記の示唆を得た。

1. 男性は、育児に対しては積極的に行おうと考えているが、家事に対してはできるだけやりたくないとする傾向があった。そのため、結婚相手には、料理好き、子ども好きなど家庭的な面を望む傾向が認められた。
2. 女性は、性役割志向の如何に拘わらず、出産・育児の期間は家庭を重視する傾向が認められた。
3. 平等志向的な女性は、伝統志向的な女性よりも就業継続を理想としており、そのため、結婚後の生活においては、家事・育児分担制を、理想の結婚相手には、自分が就業することに理解・協力のある人を理想としていた。
4. 性役割志向と理想のライフコース、理想の結婚相手像および結婚後の暮らし方は互いに影響し合っていた。

キーワード 性役割態度, ライフコース観, 大学生

Key Words Attitudes towards Gender Role, Attitudes towards Life Course, College Students

1. はじめに

1970年代以降、男女の役割について日本人の平等観が大きく変化し、特に女性の意識が以前より平等的になってきている¹⁾。その背景には、女性の高学歴化、自由平等思想、核家族化などが挙げられ、女性のライフスタイルが多様化し、結婚・家庭・仕事に対する考え方が流動化してきたと考えられている²⁾。そのため、晩婚化、非婚化、また急速に進む少子高齢化が社会問題として取り上げられるのに伴い、青年層の性役割志向の変化や、結婚観の多様化との関連について注目されるようになってきた。

性役割態度と就業との関係を検討した研究では、平等志向性のレベルが高い女性は、現在または理想のキャリア・パターンが同一企業で就労継続している(したい)、あるいは管理職に就いている(就きたい)女性であること

が明らかにされている³⁾。また、女子大学生を対象に、性役割観とライフコース観および結婚観を検討した研究では、性役割観が自身のキャリアプランに影響すること、就業志向的なキャリアプランを持つ女性は、結婚相手に対して、仕事への理解や協力が得られることを重視することなどが明らかになっている²⁾。このことから、性役割志向が変化したことによって、ライフコース観や結婚観が変化してきたことが考えられる。

一方で、性役割志向が変化しようとも、女性の社会進出が進もうとも、「男は外、女は内」という伝統的な考え方が社会から消失してしまったわけではない²⁾。特に、男性は女性よりも伝統的志向が強いことが言われており⁴⁾、今まで以上に男女間で性役割志向に対する考え方のギャップが生じていることが考えられる。

30代から50代の男性の労働力率は90%を超えており¹⁾、男性が働くことは、一般的と考えられているため、男性も女性もそのことにあまり疑問を抱かない。しかし、日本の女性の年齢階級別労働率は、M字曲線になることが知られており、出産・育児期に就業を継続する女性は、増加しているものの、一般的とは言い難いのが現状であるといえる¹⁾。将来設計を行う場面において、性役割志向、ライフコース観、結婚観など、様々な要因が影響することが考えられる。特に女性においては、出産・育児を抜きにライフコースの選択をすることは難しいことが考えられ、男性の考え方とは異なることが予測される。

受理日：2007年5月31日

- 1) 山梨大学大学院医学工学総合教育部：Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering (Master program), University of Yamanashi
- 2) 山梨大学大学院医学工学総合研究部：Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi
- 3) 玉川大学文学部：Tamagawa University, College of Humanities

社会からの期待に囚われることなく、様々なライフコースの中から、女性自身の理想のライフコースが選択できる社会になるためにも、性役割志向の性差が、どの程度社会に潜在しているのかを明らかにすることは有用であると考えます。また、性役割志向がライフコース観、結婚観とどのような関係があるかを確認することで、晩婚化・非婚化の原因を知る手がかりとなることが期待できる。そこで、本研究の目的は、青年期における大学生の性役割志向と理想のライフコース観との関係について明らかにすることとした。また、本研究におけるライフコース観には、理想のライフコース、理想の結婚相手像、理想の結婚後の暮らし方を含むものとした。

II. 対象と方法

1. 対象と方法

2002年9月から10月に、東京都及び山梨県にある大学の大学生を対象に行った。

方法は、担当教員の許可を得て学生に研究の主旨を説明後、同意が得られた学生に、講義前にアンケート用紙を配布・実施し、授業後回収箱にて回収した。なお、可能であれば事前に口頭で説明を行ったが、紙面にて、無記名であること、回答内容は全体の傾向を把握する目的で使用するため、個々の情報が外部に漏出することが無いこと、回答は任意であり、不参加により不利益がないことを説明した。ただし、医学科の学生に関しては、部活等を通して配布した。アンケート用紙の返送を持って、同意したもののみとした。

2. 調査項目

- 1) 対象者の基本属性：性別、年齢、専攻
- 2) 対象者の両親の就業形態
- 3) 平等主義的性役割態度短縮版(The Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes : 以下 SESRA-S とする) : 「女性は社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなるから、そういう職業を持たない方がよい」など15項目(逆転項目含む)から構成されており、「全然そう思わない(1点)」から「全くその通りだと思う(5点)」までの5段階尺度である。得点は15~75点の範囲であり、得点が高いほど性役割について平等志向的(男女平等の考え方)、得点が低いほど伝統志向的(「男は外、女は内」という考え方)となる⁵⁾。また、尺度の信頼性・妥当性については鈴木によって確認されており、 α 係数は、20歳以上の男女を対象として0.91であった⁵⁾。本対象における α 係数は、0.598であった。
- 4) 理想のライフコース : 「就職し、結婚して仕事を辞める」など8つの選択肢の中から単一回答形式で

回答を求めた(女性には自身の、男性には結婚相手に望むライフコース)。

- 5) 理想とする結婚後の暮らし方 : 家事(10項目)、育児(9項目)、その他「家族で出かけるときの車の運転」の計20項目に対して「ぜひ自分がやりたい」から「絶対にやりたくない」の5段階尺度とした。
- 6) 理想の結婚相手像 : 結婚相手の条件を、「有名大学を卒業している人」「男(女)らしい人」など23項目挙げ、複数回答形式で回答を求めた。

3. 分析方法

SESRA-Sの尺度得点(逆転項目含む)を算出し、尺度得点の低位25%を平等意識の低い「伝統志向群」、上位25%を平等意識の高い「平等志向群」、その中間である中位50%を「中間群」の3群に分類した³⁾。次に、母親の就業状況、理想のライフコース、理想の結婚後の暮らし方、理想の結婚相手などについて群別、性別の比較を χ^2 検定を用いて行った。なお、解析はSPSS 11.0J for Windowsを用いた。

III. 結果

1. 属性

回収票数は533名、回収率89.58%であった。内訳はA大学 医学科67名(12.6%)、A大学 看護学科194名(36.4%)、B・C大学 教育学部272名(51.0%)であった。男女の割合は、男性131名(24.6%)、女性400名(75.0%)、不明2名(0.4%)と、女性が7割以上を占めていた。平均年齢は 20.01 ± 2.31 歳であった。

母親の就業は、専業主婦143名(26.8%)、パートタイム勤務183名(34.3%)、フルタイム勤務200(37.5%)、不明7名(1.3%)であった。

SESRA-Sの平均得点は 56.65 ± 8.29 点であった。また、群別では、「伝統志向群」137名(25.8%)、「中間群」263名(49.3%)、「平等志向群」130名(24.4%)となった。

2. 性別による比較(表1)

1) 性役割志向

SESRA-Sの平均得点は、男性が 53.57 ± 9.366 点、女性は 57.63 ± 7.658 点であり、女性のほうが男性よりも平等志向的であることが有意に示された($t=-4.490$, $p=0.000$)。

性役割志向は、男女共に中間群が最多であったが、男性では次いで伝統志向群(50名:38.2%)が多く、逆に女性では平等志向群(104名:26.2%)が多く、有意差が認められた($\chi^2=11.411$, $p=0.001$)。

2) 結婚後の理想の暮らし方

男性が理想とする結婚後の暮らし方では、「是非自分がやりたい」、「積極的にやりたいわけではないが、自分の

表1 性役割志向(得点別)に見た属性の特徴

属性	SESRA-S得点	伝統志向群		中間群		平等志向群		χ^2	(p)
		25~52 (名)	点 (%)	53~62 (名)	点 (%)	63~75 (名)	点 (%)		
性別	男性	50	38.2	57	43.5	24	18.3	11.411	0.001
	女性	87	21.9	206	51.9	104	26.2		
	合計	137	25.9	263	49.8	126	24.2		
専攻	医学科	21	31.3	32	47.8	14	20.9	1.567	0.211
	看護学科	37	19.2	95	49.2	61	31.6		
	教育学部	79	29.3	136	50.4	55	20.4		
	合計	137	25.8	263	49.6	130	24.5		
母親の 就業状況	専業主婦	45	31.7	67	47.2	30	21.1	18.156	0.000
	パートタイム	60	33.0	92	50.5	30	16.5		
	フルタイム	30	15.1	99	49.7	70	35.2		
	合計	135	25.8	258	49.3	130	24.9		
理想の ライフコース	退職コース	37	59.7	22	35.5	3	4.8	71.88	0.000
	再就職コース	76	28.7	145	54.7	44	16.6		
	就業継続コース	23	12.3	90	48.1	74	39.6		
	合計	136	26.5	257	50.0	121	23.5		

仕事だと思うので行う」を合わせて50%以上である項目は、「家族で出かけるときの車の運転」(64.6%)、「移動時に赤ちゃんを抱っこ、もしくはおんぶすること」(64.6%)、「子どもと遊ぶ」(71.5%)、「子どもに勉強を教える」(57.7%)の4項目であり、育児に関する項目では性役割志向の如何に関わらず積極的に行いたいと考えている傾向にあった。また、25%を超える項目は「ゴミ出し」(38.5%)、「布団の上げ下ろし」(34.6%)、「夕食後の皿洗い」(26.9%)の3項目であり、自分の仕事であると認識している傾向にあった。一方、家事に関しては、「絶対にしたくない」とする割合が10%を超えた項目が2項目あり(「朝食作り」(17.7%)、「夕食作り」(10.0%))消極的であった。

一方女性が「是非自分でやりたい」、「積極的に行いたいわけではないが、自分の仕事だと思うので行う」を合わせて50%を超える項目は、「朝食作り」(60.9%)、「夕食作り」(59.9%)、「夕食のための買い物」(57.9%)、「洗濯をする」(51.8%)、「洗濯物を干す」(50.5%)の家事5項目と、「育児休暇を取る」(67.3%)、「赤ちゃんにミルクをあげる」(57.6%)、「子どもが病気の時の看病」(60.5%)の育児3項目の計8項目であった。女性の場合、自分の仕事では無いとしている項目でも「手の空いている方どちらかが行く」を選択する割合が高くなるのが特徴であった。

3) 理想の結婚相手

男性では「価値観の合う人」(78.5%)、「料理好きの人」(74.6%)、「優しい人」(73.8%)、「子ども好きの人」(73.1%)の順で上位に挙げた。一方女性は、「価値観の合う人」(89.2%)、「優しい人」(87.9%)、「子ども好きの人」

(82.7%)、「家事・育児を分担する人」(74.1%)の順で上位に挙げた。男女共に、価値観の合う相手を理想として挙げていた。また、女性が相手に家事・育児の分担を求めていることが特徴であった。

3. 性役割志向の違いによる比較

以下、性役割志向の違いをさらに男女別に検討した。

1) 男性(表2)

①母親の就業形態

母親がパートタイム勤務である人ほど、伝統志向的である傾向にあるが、男性の性役割志向と母親の就業形態の違いに有意差は認められなかった。

②専攻

専攻の違いによる、性役割志向の違いは認められなかった。

③結婚相手に望む理想のライフコース

性役割志向が平等志向的であるほど、相手の就業継続を理想とする傾向が認められた($\chi^2=15.274$, $p=0.000$)。

④理想とする結婚後の暮らし方(図1)

男性が理想とする結婚後の暮らし方では、伝統志向群より平等志向群の方が有意に積極的に自分の仕事として行おうとしていた項目は、「ゴミを出す」を除く家事9項目(「布団の上げ下ろしや、ベットの直し」($\chi^2=6.180$, $p=0.014$)、「お風呂の掃除」($\chi^2=8.164$, $p=0.004$)、「夕食のための買い物」($\chi^2=8.519$, $p=0.000$)、「部屋の掃除」($\chi^2=13.784$, $p=0.000$)、「夕食作り」($\chi^2=12.813$, $p=0.000$)、「朝食作り」($\chi^2=22.023$, $p=0.000$)、「夕食後

の皿洗い($\chi^2=10.938, p=0.001$), 「洗濯をする($\chi^2=11.182, p=0.001$), 「洗濯物を干す($\chi^2=10.007, p=0.002$)」であった。一方「家族で出かけるときの車の運転($\chi^2=7.004, p=0.008$)」に関しては, 伝統志向群のほうが, 平等志向群よりも, 有意に積極的に自分が行いたいと考えていた。

伝統志向群の人は, 家事に関する全項目において, 「絶対にやりたくない」とする割合が10%を超えていた。特に食事に関する項目と, 洗濯に関する項目においては, 「できればやりたくない, 「絶対にやりたくない」を含め「やりたくない」者が50%を超えていた。ことに朝食作りにおいては, 80%を超えていた。一方平等志向群の人は, 家事に関してもできる限り協力しようとしている傾向が認められ, 中間群の人は, 家事は男女どちらでも手の空いている方が行えば良いと考えている傾向が認められた。

⑤理想の結婚相手像(表2)

伝統志向群が考える理想の結婚相手像は, 「料理好きの人」(88.0%), 「子ども好きの人」(82.0%), 「優しい人」(80.0%)の順で上位に挙がった。平等志向群の人は, 「価値観の合う人」(82.6%), 「優しい人」(73.9%), 「料理好きの人」(73.9%)の順で上位に挙がり, 性役割志向による有意な差は認められなかった。

2) 女性(表3)

①母親の就業形態

母親の就業形態に関わらず, 中間群が最多ではあったが, 母親がフルタイム勤務であるほど, 平等志向的であり, 有意差が認められた($\chi^2=14.443, p=0.000$)。

②専攻

いずれの専攻においても, 中間群が最多であった。しかし, 医学科と看護科は次いで平等志向群が多く, 教育学科は次いで伝統志向群が多い傾向が認められ, 専攻による有意差が認められた($\chi^2=4.428, p=0.035$)。

③理想のライフコース

理想のライフコースにおいては伝統志向群, 中間群どちらも再就職コースが最多であるが, 伝統志向群は退職コースにシフトしており, 中間群は仕事継続コースにシフトしている。また, 平等志向群は仕事継続コースが最多であった。性役割志向が平等志向であるほど, 仕事を重視したライフコースを選択する傾向があり, 有意差が認められた($\chi^2=54.919, p=0.000$)。

④理想とする結婚後の暮らし方(図2)

女性では, 伝統志向群の方が平等志向群よりも積極的に行いたいと考えている割合が有意に多かったのは, 家事8項目(「お風呂の掃除($\chi^2=11.805, p=0.001$), 「夕食のための買い物($\chi^2=27.607, p=0.000$), 「部屋の掃除($\chi^2=22.105, p=0.000$), 「夕食作り($\chi^2=23.870, p=0.000$), 「朝食作り($\chi^2=23.368, p=0.000$), 「夕食後の皿洗い($\chi^2=13.473,$

表2 男性における性役割志向別の特徴

SESRA-S得点	伝統志向群		中間群		平等志向群		(χ^2)	(p)	
	25~52 (名)	点 (%)	53~62 (名)	点 (%)	63~75 (名)	点 (%)			
専攻	医学科	18	36.0	23	46.0	9	18.0	0.63	0.427
	看護学科	3	25.0	4	33.3	5	41.7		
	教育学科	29	42.0	30	43.5	10	14.5		
	合計	50	38.2	57	43.5	24	18.3		
母親の 就業状況	専業主婦	14	36.8	16	42.1	8	21.1	2.347	0.126
	パートタイム	24	53.3	18	40.0	3	6.7		
	フルタイム	10	22.7	21	47.7	13	29.5		
	合計	48	37.8	55	43.3	24	18.9		
理想の ライフコース	退職コース	15	60.0	8	32.0	2	8.0	15.274	0.000
	再就職コース	26	46.4	24	42.9	6	10.7		
	就業継続コース	9	19.6	22	47.8	15	32.6		
	合計	50	39.4	54	42.5	23	18.1		
理想の結婚相手	①料理好きな人(88.0%)		①価値観の合う人(78.9%)		①価値観の合う人(82.6%)				
	②子ども好きな人(82.0%)		②優しい人(68.4%)		②優しい人(73.9%)				
	③優しい人(80.0%)		③子ども好きの人(66.7%)		③料理好きな人(73.9%)				
	④価値観の合う人(76.0%)		④料理好きな人(63.2%)		④子どもが好きな人(69.6%)				

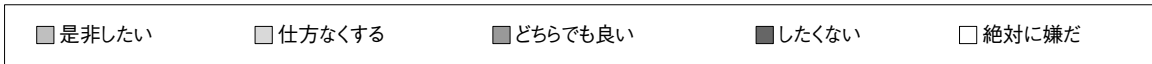
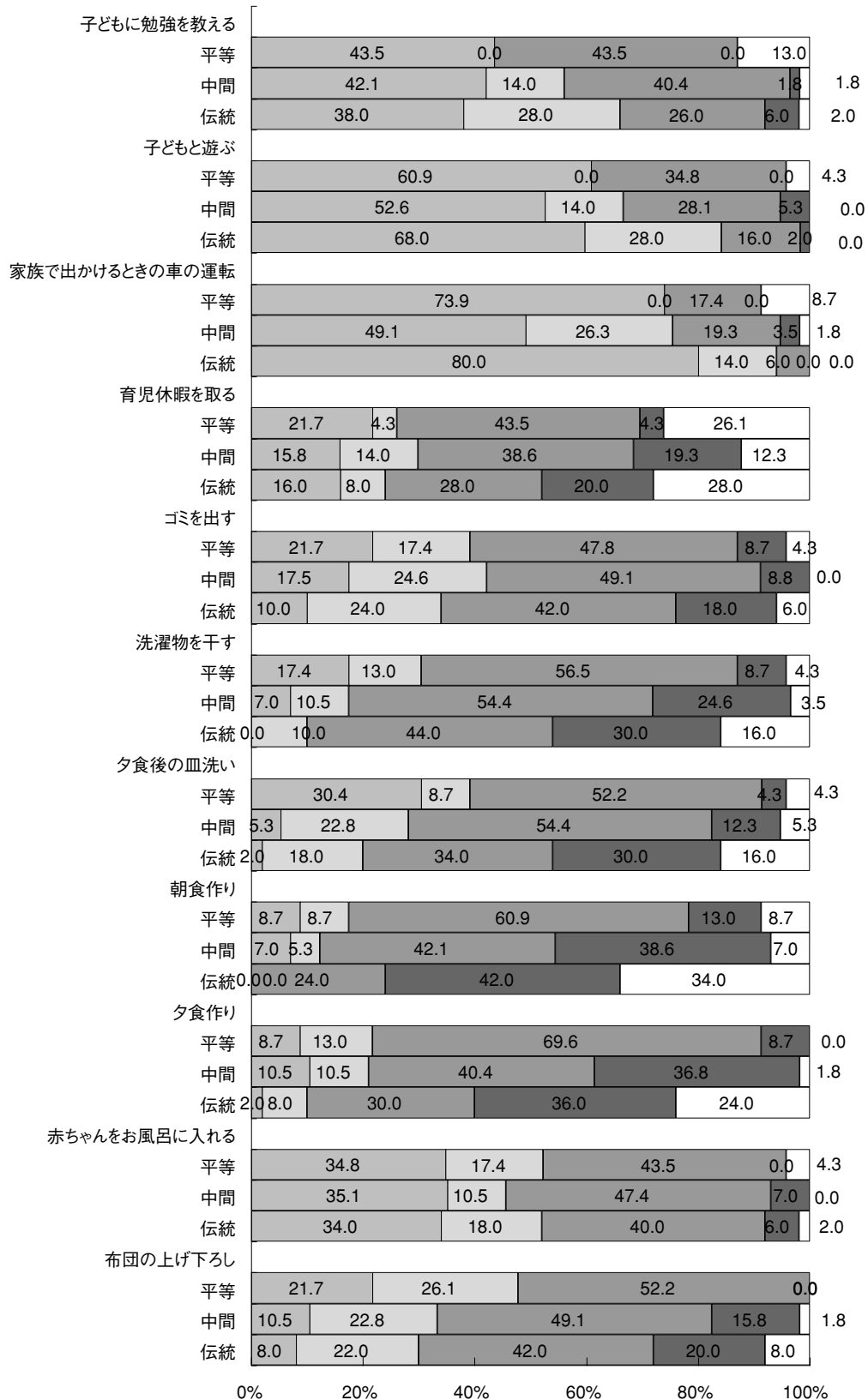


図1 男性の性役割態度別にみた結婚後の暮らし方

表3 女性における性役割志向別の特徴

SESRA-S得点	伝統志向群		中間群		平等志向群		χ^2	(p)	
	25~52 (名)	点 (%)	53~62 (名)	点 (%)	63~75 (名)	点 (%)			
専攻	医学科	3	17.6	9	52.9	5	29.4	4.428	0.035
	看護学科	34	18.8	91	50.3	56	30.9		
	教育学科	50	25.1	106	53.3	43	21.6		
	合計	87	21.9	206	51.9	104	26.2		
母親の 就業状況	専業主婦	31	29.8	51	49.0	22	21.2	14.443	0.000
	パートタイム	36	26.3	74	54.0	27	19.7		
	フルタイム	20	13.1	78	51.0	55	35.9		
	合計	87	22.1	203	51.5	104	26.4		
理想の ライフコース	退職コース	22	59.5	14	37.8	1	2.7	54.919	0.000
	再就職コース	50	24.0	121	58.2	37	17.8		
	就業継続コース	14	10.0	68	48.6	58	41.4		
	合計	86	22.3	203	52.7	96	24.9		
理想の結婚相手		①優しい人 (90.8%) ②子ども好きな人 (88.5%) ③価値観の合う人 (86.2%) ④男らしい人 (75.9%)		①価値観の合う人 (89.8%) ①優しい人 (89.8%) ③子ども好きな人 (85.4%) ④家事・育児負担する人 (78.0%)		①価値観の合う人 (90.3%) ②仕事をするのを認めてくれる人 (83.5%) ③仕事をしても、家事・育児をする人 (82.5%) ③優しい人 (82.5%)			

p=0.000)」、「洗濯をする($\chi^2=25.479$, p=0.000)」、「洗濯ものを干す($\chi^2=16.025$, p=0.000)」と育児7項目(「赤ちゃんにミルクをあげる($\chi^2=5.630$, p=0.018)」、「あかちゃんのオムツを替える($\chi^2=9.094$, p=0.003)」、「育児休暇を取る($\chi^2=6.477$, p=0.011)」、「移動時に赤ちゃんを抱っこ、もしくはおんぶする($\chi^2=6.196$, p=0.013)」、「子どもに勉強を教える($\chi^2=4.153$, p=0.042)」、「保育所の送り迎え($\chi^2=10.042$, p=0.002)」、「子どもが病気の時の看病($\chi^2=11.187$, p=0.001)」)の計15項目であった。全体的に「やりたくない」とする割合は少なく、平等志向群ほど「手の空いている方がどちらでも良いから行えばよい」とする割合が増えるのが特徴であった。

⑤理想の結婚相手(表3)

理想の結婚相手においては、伝統志向群は「優しい人」(90.8%)、「子ども好きな人」(88.5%)、「価値観の合う人」(86.2%)、「男らしい人」(75.9%)などの内面を重視しているのに対して、平等志向群の人は「価値観の合う人」(90.3%)、「自分が仕事をするのを認めてくれる人」(83.5%)、「仕事はしても家事・育児を行う人」(82.5%)など、自分が仕事を継続する上での理解と協力を重視している傾向があった。

IV. 考察

男性は、平等志向的であるほど結婚相手の仕事継続を理想とする傾向にあった。また、理想とする結婚後の暮

らし方でも、平等志向的であるほど、家事を自分の役割と考え、できるだけ行おうと考えている傾向が認められた。伝統志向的な人は家事全般を、できれば自分で行いたくないと考えていた。しかし、理想の結婚相手には、性役割志向の違いはほとんど認められず、「料理が好きな人」、「優しい人」、「子ども好きな人」などの家庭的な面を求める傾向があった。男性において、性役割志向と相手に望む理想のライフコース、結婚後の暮らし方は互いに関係があった。しかし、いかなる性役割志向であっても、結婚相手には家庭的な面を求める傾向があり、性役割志向と理想の結婚相手像の関係は認められなかった。男性は女性が働くことを認めている人であっても、家庭のことはできれば女性に任せたい、あるいは女性がすべきだと考えていることが伺える。つまり男性にとっては、相手に望む理想のライフコースと結婚相手は、同一線上には無いことが考えられた。

一方、女性におけるライフコース観と結婚観を分けて検討した先行研究²³⁾では性役割志向が伝統志向的であるほど、就業継続意欲が弱く、就業よりも家庭を重視する傾向にあり、逆に、平等志向的であるほど、就業継続意欲が強かったとしている。本研究でも、性役割志向と理想のライフコース、および理想の結婚相手像、結婚後の暮らし方に関しては、男性と同様平等志向的であるほど、就業継続を理想のライフコースとする傾向にあった。しかし、就業継続意欲が強い平等志向的な女性であっても、再就職コースを選択する割合が、男性と比べて高かった

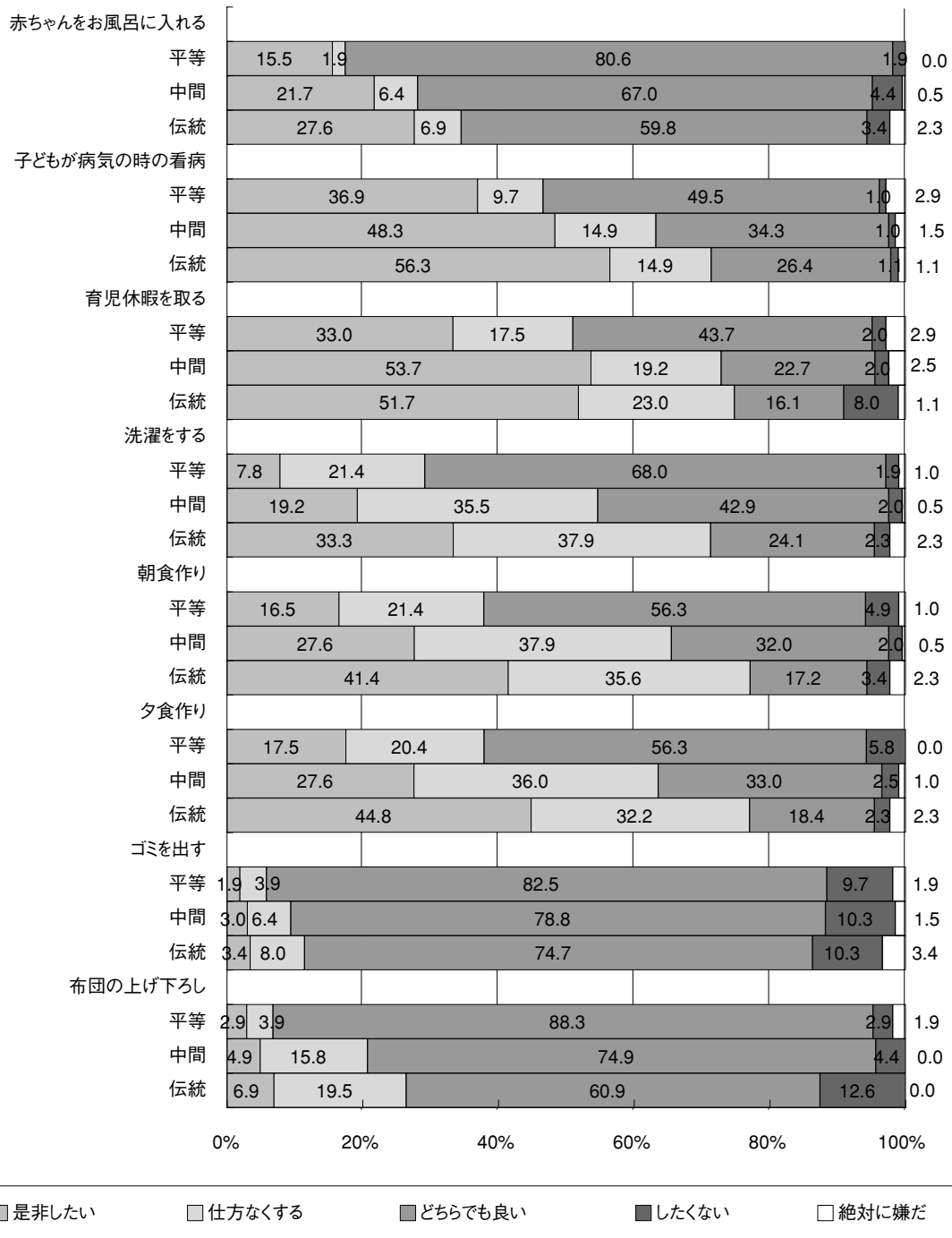


図2 女性の性役割態度別にみた結婚後の暮らし方

ことから、出産・育児期が女性自身にとって、大きなウェイトを占めていること、男性にとっては実感が無いことが推察される。このことは、女性が家事・育児への夫の協力を半ば諦めていることの表れとも考えることもできるのではないだろうか。

女性の性役割志向は、母親がフルタイム勤務である人ほど平等志向的であったが、男性ではこうした影響が見られなかったことから、母親の就業状況は、女性の性役割志向を決定する要因の1つであると考えられた。

次に、女性が理想とする結婚後の暮らし方では、基本的には性役割志向の如何に関わらず、家事・育児を女性の仕事であると認識しているが、男女どちらでも手の空いている方が行えば良いと考えている傾向が認められた。とりわけ、伝統志向群は、家事・育児を積極的に自分で行いたいと考える傾向が認められた。理想の結婚相手には、男性同様の「優しい人」、「子ども好きの人」などの他に、女性特有の「家事・育児を分担する人」が挙っており、家事・育児を女性の仕事と認めつつ、男性にも

手伝って欲しい, 手伝うべきだという考えがあることが伺える。男女共に, 性役割志向の違いに関わらず, ある程度は「男性の仕事, 女性の仕事」というカテゴリー分けをしていることが分かり, またその項目は男女で一致していることが分かる。しかし, 女性, 特に平等志向群は, 理想の結婚相手として「自分が仕事をすることを認めてくれる人」, 「仕事をして, 家事・育児をする人」などを上位に挙げており, 仕事を継続するためにはパートナーの考え方や行動が重要になっている。

ところが, 男性は平等志向的であっても, 結婚相手には家庭的な面を求め, 家事もできれば行いたくないと考えており, 平成17年度の国民生活基礎調査を見ても⁶⁾, フルタイムで働く妻の1/4は平日の家事時間が4時間を超え, 男性の1/2は家事・育児時間が15分以内と遙かに短い⁷⁾。

結婚相手に望む条件として, 男女共に「価値観の合う人」が挙がっている。仕事の継続を希望する女性と, 家事・育児をこなしてくれる女性を希望する男性では, なかなか理想の結婚相手に巡り会えないという現実があることが考えられる。人口問題研究所の調査⁶⁾によれば, いずれは結婚しようと考えている未婚の割合は, 近年9割程度で推移しており, 結婚願望が決して低くないにも関わらず, 「適当な相手に巡り会わない」, 「仕事(学業)に打ち込みたい」などを未婚の理由にしている若者が増えている。結婚することが, 自己実現の妨げになると考える傾向にあることが分かる。

謝辞

本研究にあたり, お忙しい中アンケートにご協力下さいました学生の皆様, また, 講義時にアンケート用紙の配布にご協力下さいました教員の皆様に, 厚くお礼を申しあげます。

引用文献

- 1) 内閣府 (2004)男女共同参画社会に関する世論調査. <http://www.cao.go.jp/survey/h14/h14-danjo/index.html>
- 2) 中井美樹(2000)若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観. 立命館産業社会論集, 36(3):117-126.
- 3) 鈴木淳子(1996)若年女性の平等主義的性役割態度と就労の関係について(就労経験および理想の仕事キャリア・昇進パターン). 社会心理学研究, 11(3):149-158.
- 4) 東 清和(1990)青年期における性役割志向性の性差. 社会心理学研究, 6(1):23-32.
- 5) 鈴木淳子(2002)平等主義的性役割スケール短縮版. 心理測定尺度集—人間の内面を探る(自己・個人内過程)(堀 洋道, 山本真理子). サイエンス社, 東京, 153-157.
- 6) 国立社会保障・人口問題研究所(2006)第3回出生動向基本調査. <http://www.ipss.go.jp>

- 7) 男女共同参画白書(2006)内閣府 男女共同参画局, <http://www.gender.go.jp>